

事業報告

◆世界の歩き方講座～中国編～

6月2日(水)めざましい成長を遂げる中国、また万博開催に沸く上海に焦点を当て、中国の観光事情や最新情報について学びました。

◆つくってみよう!世界の料理～韓国編～

6月19日(土)人気の韓国料理の調理方法と文化や習慣を学びました。身近な料理を通して楽しく国際理解を深めました。

◆親と子の国際講座～つくってみよう!世界のおやつ～

6月27日(日)に市内の小学生の親子が参加し世界各地のおやつに注目し、クイズやゲームをとおして世界の国々について学び、おやつ作りにも挑戦しました。

◆花火鑑賞会

8月6日(金)アットホームな雰囲気の中で外国人と市民が共に花火を観賞し楽しい時間を過ごしました。

◆はじめのいっぽ～楽しく学ぼう!タイ語編～

8月21日(土)タイへの理解を深めるため、タイの言葉を中心に文化や習慣を学びました。まるでタイに旅行したような気分で会話練習を楽しみました。

◆つくってみよう!世界の料理～ガーナ編～

9月4日(土)見たこともない食材に驚きながらも、料理をとおしておいしく楽しくガーナについて学びました。講師によるアフリカンドラムの演奏も好評でした。



◆国際交流パーティー(お月見)

10月2日(土)様々な国籍の方が集まり、バラエティーに富んだ料理や、茶道や書道などの日本文化体験コーナーを楽しみました。



◆世界の歩き方講座～チェコ編～

10月7日(木)中世の街並を残すチェコの歴史やチェコ人の精神等、ガイドブックでは学べないチェコの奥深さを学びました。

今後の行事予定

◆国際交流パーティー(年末)

おいしい料理を楽しみながら、外国人の方のお国紹介やゲームで交流しましょう。
12月18日(土)開催

◆国際交流のつどい

多くの方に国際交流を身近に感じていただけるような、講演会や国際交流団体活動紹介・バザー等を開催します。
3月頃予定

◆クラシック音楽で巡るヨーロッパの街 vol.7

水戸芸術館の協力を得て、世界の歴史・文化、クラシック音楽について学びます。
3月頃予定

【外国人対象】For Foreign Residents

◆スキーツアー
～Ski Tour～

白銀の世界でスキーを楽しみませんか。
2月予定 (February)

◆市内ウォッチング
～City Tour For Introducing Public Facilities～

3月予定(March)

◇機関紙へのご意見や感想をお待ちしています。

開館時間：午前9時から午後9時まで
休館日：月曜日、祝日

〒310-0024 水戸市備前町6-59
水戸市国際交流センター内
(財)水戸市国際交流協会
Tel:029-221-1800 Fax:029-221-5793
http://www.mitoic.or.jp/
E-mail:mcia@mito.ne.jp



水戸市・アナハイム市学生親善大使の交流

アナハイム市学生親善大使来水

6月25日～7月8日に、アナハイム市から4名の学生親善大使と引率1名が来水しました。学生達は水戸市内でホームステイをしながら日本の生活様式などを学び、小中学校への訪問などを通じて水戸市民と交流しました。
今回は、学生を受入れてくださったホストファミリーに焦点をあて、感想等を伺いました。

〈アナハイム市学生親善大使〉

Danielle Vargas (17歳 女性) Alvin Hinh (18歳 女性) Deborah Kwak (18歳 女性) Nhu Nguyen (17歳 女性)
(引率) Christina Maguire 高等学校教諭 女性

ホストファミリーインタビュー

ホストファミリー：佐々木康さんご家族、落合貴裕さんご家族

—佐々木さんは2年連続の受入れて、落合さんは今年初めてでしたが、いかがでしたか？

佐々木：子供達に世界には日本語を話さない色々な人がいるんだよということを知ってほしかったので、今年も応募したいなと思っていました。子供達は去年は緊張していましたが、今年は慣れて、最初の挨拶から自然になじんでいました。

落合：家族にとって刺激のある新しい事にチャレンジしたいと思って今回応募しました。

英語が全然できないので、最初は不安が結構大きかったのですが、学生が日本文化に触れて、喜んだり驚いたりする姿を見て自分達も嬉しかったです。私達にとって当たり前なことでも、学生の目線で見ると、日本の素晴らしさに気づくことがたくさんありました。

—2週間、どのようにコミュニケーションをとっていましたか？

落合：写真やパソコン、音楽等が良いコミュニケーションツールになっていました。音楽の趣味が合ったので、お互い好きな曲を交換したり、お互いの写真を見せ合ったりしました。

佐々木：毎日「今日何をしたのか」と「明日は何をするのか」について話し、そこから話を盛り上げていきました。例えば着付け体験の前日は、着物から七五三のことまで話を広げたりしました。予習の意味でもあったけれど、少しでも日本文化について理解を深めてくれるといいなと思いました。

落合：初めは英語に自信がなかったけど、積極的に話しかけるようにしました。「間違ってもいいや」って。自信を持って話をすれば大丈夫なんですね。

—ホストファミリーを考えている方へメッセージをお願いします。

学生と一緒に過ごす時間が一番長いお母さんは、不安に思われるかもしれませんが、一日の出来事等を話したり、何気ない普段の生活を体験させてあげることでコミュニケーションはとれると思うのです。お子さんがいる家庭なら、逆に子供の方が柔軟なので、何も構えずにしゃべったりするものです。親が楽しんで受け入れれば、子供達にもその楽しさが伝わります。

きっとホストファミリーをやってみたいという気持ちを持っているご家族って多いと思うんです。本当にかげがえのない経験になるので、どうしようか迷っているご家族ほど受入れを経験してほしいです。思い出は一生物ですよ。



ホストファミリー皆で祝ったAlvinさん(前列一番右)の誕生日会にて

水戸市学生親善大使

21回目にあたる今年度の水戸市学生親善大使は、6名の中学生を含む総勢12名が選ばれ、7月23日～8月8日の17日間、アナハイム市民の家庭にホームステイしながら、アナハイム市の関連施設を視察したり、英語の研修を行いました。感受性豊かな学生達にとって、相互理解と友好親善を育む貴重な機会となりました。

<平成22年度水戸市学生親善大使>

大内 恵理奈 (中学2年)	高橋 真紀 (中学3年)	桐花 悠介 (高校2年)
勝山 湧斗 (中学2年)	西村 未咲 (中学3年)	小泉 摩紘 (高校2年)
篠原 沙奏子 (中学3年)	上ノ内 郷 (高校1年)	関根 伸男 (高校2年)
高久 美穂 (中学3年)	大内 歩美 (高校2年)	高星 千陽 (高校2年)

(団長) 細谷 康之 赤塚中学校教諭



アナハイムエンジェルス
の松井選手とともに

学生インタビュー

アナハイムで過ごした2週間、学生達はどんなことを感じたのでしょうか。親善大使を代表して、4名の学生に話を伺いました。
[学生親善大使:高星 千陽、上ノ内 郷、篠原 沙奏子、西村 未咲]

—まず、アナハイムの印象を聞かせてください。

篠原： 観光地もあるけれど、自然も豊かできれいでした。住宅街には木がたくさん植えてあって自然と共生している感じがしました。それから、朝晩は寒い位なのですが、日中になると晴れてカラッとした気候が印象的でした。日差しが強かったけれど、私には合いました。

高星： やはり乾燥しているせいか、ホストファミリーが水をすごく大切にしている姿が印象的でした。洗いの物をしていて水を出しっぱなしにしていると、「止めて」と言われました。食洗機を使っているのも手洗いより水を使わないからという理由みたいですね。

西村： 家と家との間に塀などがなく隣同士でもすぐ行き来できるから、ホストファミリーが食事の準備をされていて何か足りない、隣の家にもらいに行ったりしていました。例えば、自分の庭のオレンジを持って行ってそれと物々交換したり…。ご近所同士のふれあいがいっぱいだなと思いました。

上ノ内： 本当にアナハイムの人達は気さくでした。自分のホスト宅の隣のおじさんも、芝刈りをしていて、ついでにうちの庭の分まで刈ってくれました。

—どんなことに日本との違いを感じましたか？

上ノ内： 時間の感覚ですね。わりとアバウトで、出発時間が最初の予定と違ったりするのでちょっと大変でした。でも、日本のように人がせかせかしてなくて、時間がゆったり流れていました。

西村： レストランに行った時に、1人分の料理のサイズが大きいことに驚きましたが、残った料理を持ち帰れるように店員さんが箱を用意してくれました。食べ物が無駄にならず、良い習慣だと思います。

上ノ内： それから、日本だとまだまだ外国人は特別な目で見られがちですね。でも、アナハイムの人達はそういったことにとらわれず、全てを受け入れてくれて、日本よりもっとグローバルというか、開けている感じがしました。

高星： だからこそ色々な文化があるんだと思いました。私のホストマザーも色々な国の人がいることを当たり前のことと受け止めていて、自然にそういう感覚を身につけていることがいいなと思いました。

—ホームステイはいかがでしたか？何かエピソードを教えてください。

高星： 最初はお客さん扱いでぎこちなかったけれど、次第に「～をやって。」とか「これやって。」と言ってきて本当の家族みたいでした。すごく温かい家庭で、初対面の私達にも優しく接してくれました。

篠原： 私も高星さんと一緒にステイしたんですけど、家族がすごく日本に興味を持ってくれることが嬉しかったです。食事の時に「いただきます」、「ごちそうさま」と言っていたら、「日本人はすごく礼儀正しいのね。」と感心していました。

西村： 私、途中でじんましんが出たんですけど、ホストファミリーが私にも合う薬やせっけんを買ってきてくれたんです。あと、自己紹介で「音楽が好き」と書いたら、わざわざ私の興味に合いそうな内容の演奏会に連れて行ってってくれて感動しました。滞在中の私の様子が映っているDVDまで作ってくれて本当に親切にしてくれました。

上ノ内： 自分のホストファミリーは南米から移住してきたので、お母さんの英語はスペイン語のアクセントが強くて聞き取りにくかったんですよ。二人の時は身振り手振りでやりとりをしたのでちょっと大変だったかな。でも、すごく優しい人でした。大学生のホストブラザーがわかりやすい英語で説明してくれて、いつも助けてくれました。日本のことに興味を持っていて、色々話したことも楽しかったです。

—それぞれホストファミリーと良い時間が過ごせたようですね。この経験を通して、何か自分の中で変わったことはありますか？

西村： 英語をもっと勉強したいと思うようになりました。自分の言いたいことが言えなくて悔しかったから、またアナハイムに行って今回話せなかったことをたくさん話したいです。

高星： 私達の年代は、つい家族との距離を置きたがるのですが、ホストファミリー宅の中高生の子達はご飯を食べたり、カードゲームをしたり、ずっと家族と一緒にでした。私ももっと家族との時間を大切にしようと思いました。

篠原： びっくりしたのは、家の手伝いのこと。滞在先の子供達全員がお母さんの家事を手伝っているんです。私と近い歳なのに自主的に手伝っているのが尊敬しました。あと、夜更かしをしても朝きちんと起きていたので、規則正しい生活を心掛けたいと思いました。

上ノ内： アメリカ人は相槌を打ったり、目を見て人の話を聞いてくれるんです。自分も英語がわからなくて頑張って聞くようにしていたら、すごくコミュニケーションが取れている感じがしました。聞いてもらえて嬉しかったから、日本でもちゃんと人の話を聞こうと思うようになりました。あと、「海外で働く」という夢を叶えたいと更に強く思えるようになったことが収穫です。グローバルにいきたいです！

—多くの事を学んだ皆さんの今後の活躍が楽しみです。ありがとうございました。



(左から)
上ノ内 郷、篠原 沙奏子、
西村 未咲、高星 千陽

保護者からの感想

お子さんをアナハイムに送り出すにあたって、保護者の想いはどのようなものだったのでしょうか。保護者を代表して、上ノ内 由紀さんと篠原 裕美さんに伺いました。

—学生親善大使への応募のきっかけは？

上ノ内： もともと息子は海外に行きたがっていたので、いつかは是非という気持ちがありました。市報で募集記事を見た時に、市の主催なので身近で応募しやすいと思い、家族全員の意見が一致しました。

篠原： 娘も小学生の頃からアメリカに行きたがっていました。今年から中学生も対象と知り、「もう応募するしかない!」という感じでした。

—このプログラムに期待していたことは？

篠原： とにかく色々感じてほしかったので、「お土産に、毎日感じた事を日記に記して、それを見せて。」と娘と約束しました。将来、娘がくじけそうな時に読み返してくれればいいなと思います。

上ノ内： どこにも人がいて、それぞれの生活があるということ、喜んだり悲しんだりする人がいることを知ってほしいと思っていました。あとは本人の感受性次第なので、「行かなければわからない。」という思いがありました。

—どんなことが心配でしたか？

上ノ内： 一番の心配は、アナハイムに行く直前に体調を崩して行けなくなってしまうことでした。現地で体調が悪くなったら、自分で何とかすることも大人になるのに必要なことなので、行ってからの心配はほとんどなかったです。今回、携帯電話の使用は禁止ということでしたが、今の子は携帯だけの生活なので、私は逆に携帯のない生活も新鮮で「良いチャンス!」と思いました。

篠原： 体調管理については、上ノ内さんと同じですね。娘の場合は中学生なので、英語でのコミュニケーションが取れるか心配でした。でも、現地での生活のことはもうお任せするしかないという気持ちで、本当は、現地から連絡がほしい気持ちもありましたが、何かあったらホストマザーに相談するようにとアドバイスしました。



—このプログラムへの参加前後でお子さんに変化はありましたか？

篠原： ホストファミリーのお宅では、家族みんなで食事を作って一緒に食べるそうです。今まで娘は作ってもらおうのが当然だと思っていたのですが、帰ってきてから、私のお手伝いをしてくれたんです。次の日だけでしたけど、それから、英語ができなかったことにショックを受けていて、英語の勉強を頑張ろうという意識が芽生えたようです。

上ノ内： とにかく楽しかったみたいです。今は現実に戻って学校の課題や部活動に追われる生活なので、「変化」は長いスパンで感じるものなのでしょう。アナハイムからの英文メールに必死で返信している姿をみると、そういうことが今後の息子の生活に色々変化をもたらすのではないかなと思います。このプログラムに参加しないで高校生活を終わると、この経験を経て終わるとでは、今後の自分の道の決め方も変わってくるかもしれません。これからどう成長するかが楽しみです。

—ありがとうございました。

アナハイム市からのメッセージ

アナハイム市側の姉妹都市交流を担当しているヘンリー・スーシー氏からのメッセージを紹介します。



アナハイム市姉妹都市委員会
文化交流委員長
ヘンリー・スーシー

アナハイム市姉妹都市委員会(ASCC)は、姉妹都市との国際的提携を市全体への貢献手段であると捉え、本来の姉妹都市交流事業の基本方針をより活性化させる必要があるという考えのもと、2009年10月にアナハイム市議会において承認されて発足しました。

当委員会は、アナハイム市と水戸市が姉妹都市締結を結んだ1976年より姉妹都市交流を担当してきた非営利組織、アナハイム市姉妹都市協会(ASCA)の後を継いだ形となりますが、ASCCは市議会直属の組織です。委員会には、デザインリゾート等の企業や、商工、観光、教育関係団体が名を連ねている他、アナハイムの多様性を代表する様々な職種の委員がいます。

ASCCには経済開発、行政や文化面における交流の小委員会があります。小委員会の目標は、姉妹都市との間で様々なビジネスにおける良好な関係を構築すること、協働の促進、成功事例の共有、学生や市民が海を越えた友情を育まれるよう、交流の機会を促進することです。その中で、文化交流委員会は水戸市とアナハイム市の学生交換交流事業を担当しています。私はASCAでもこの事業に携わった経験から、委員長に任命されました。

アナハイム市学生親善大使派遣事業では、毎年高校生と引率者を水戸に派遣しています。

また、水戸市学生親善大使受け入れ事業は、アナハイム市の協力も得て、大変充実したプログラムとなっています。

両市の学生が代表としてお互いの市を訪問できたことは、学生達にとって大変名誉なことであり、人生をより豊かにする経験となったことでしょう。

これまで親善大使として往来した両市の学生は、お互いの生活について学ぶという貴重な機会を与えられてきました。それは1985年以来、両市においてずっと素晴らしいもので在り続けています。我々は、相互コミュニケーションと日米独自の文化の受入れを促進してきたこの交流が、今後も永く続くことを願っています。

※各インタビューの原文は当協会のHPにてご覧いただけます。